

山とスキー



第二十四號

札幌山とスキーの會發行

大正十二年二月十五日發行

大正十年六月七日第三種郵便物認可
大正十二年二月十四日印刷納本

次目號四十二第

記 事

フィンランドのスキー

比 企 元 (一八)

五月の立山

大 鳥 亮 吉 (一五)

ヒュツテの位置と設備について

加 納 一 郎 (一三)

雪 草 紙

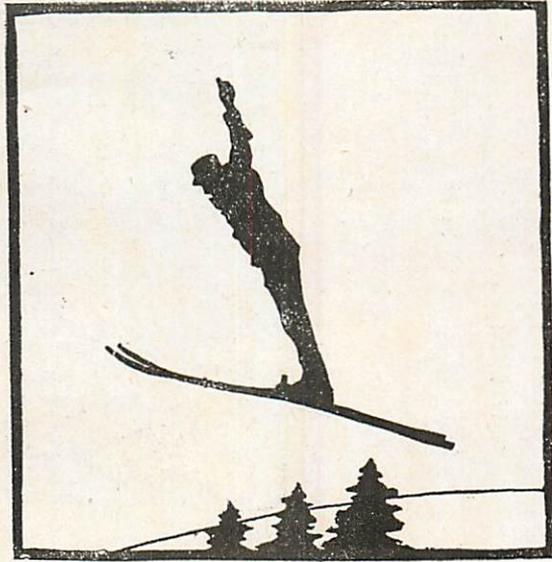
ボースケニーゲル (一六)

圖 版

第二回エヴェレスト探險隊首腦者

北面より見たるエヴェレスト

フ イ ン チ



く な み 極 快 壯 其 は て み 試
し 深 趣 興 其 に 更 は て し 達 技

！一キスよれらみ試



通 大 町 穂 稻 市 樽 小

店 具 動 運 屋 梅

【 呈 進 グ ロ タ カ 】

番 〇 七 樽 小 替 振 番 六 八 九 話 電

奥羽本線板谷驛より
近し。東京より
九時間にて達す。



優良なスキ一地しこてらたれ

五色温泉泉

山形縣南置賜郡上山村板谷

フィンランドのスキー

比 企 元

フィンランドの運動雜誌 Suomen Urheilulehtiは平常は無論フィンランド語で書いてある。二三冊持つて居るが全く齒が立たぬ、スキーの挿歯を見て何かスキーに關する事が書いてあると思ふ位のものである。これが特別號として全部エスペラント語で書いたものを發行した、その内の一文「Ja skido en Finnlando?」(記者は Jan-ni Pihkala)を譯出したものである。新興國の自家宣傳に乗せられた氣味があるが、とにかく書いて見た。文の下手なのは譯者の文才の程度を示すものである。エスペラントに罪はない。

歴史の記録から考へるミスキーはフィンランド人の間には原始時代から用ひられた事が知られる。

紀元五世紀の時、すでにギリシアのプロコピオス及びゴートのヨルダネスと言ふ二人の歴史家がフィンランド人の

事を Skrifanoj と言つて居る。これは「長き棒の人」ミ言ふ意味である。これより三百年後、パウルス、ワルネフリードがこれを説明して「飛び行くフィンランド人、何故ならば足の下に弓形をした長きものを着けて飛行き野獸を狩る」ミ言つて居る。

フィンランドの民族的傳説叙事詩なる「カレヴァラ」の中にスキー獵について面白い事が現れて居る。レミンケイネンミ言ふ英雄は愛人を得る爲、及び英雄的行爲を満す爲に、スキーに依つて地獄の麁を獵つた。この時の有様は――詩によれば――

火がスキーからきらめき

杖からは煙……

ミ言ふ程早く飛んだ。

カレヴァラの中にはスキトの種々の名稱がある。例へば

Lyly. 又は Kalhu. の如きである。この前者は左足に着けて行進中『滑る』爲のものであつて、後者は右足に着けて『蹴る』爲のものである。十五世紀に發行せるオラウス、マーンの記録によれば、前者は後者よりも約三十三程長いのである。

この様な原始の状態にあつては、物は急激に變化しないと言ふ事を考へるならば、スキーが特別な發達するには長い年月を経たものであつて、スキーの新時代の始めまでに數百年を以つて數ふ事を得ると言ふ事は明白であらう。

十九世紀に於けるフィンランドに於けるスキーの發達は一は狩獵に用ふるもの、他は平常旅行に用ふるものと、互に獨立した動機により明白に區別するやうになつた。生活手段が狩獵、殊に大なる獸の狩獵に限られるやうになつてスキーはスポーツ的のものとなつた。レミンケイネンの麋狩の詩も全くスポーツ的の氣持で書かれてゐるものである。しかし住民が散失して、この狩獵も次第に稀になり、遂に十八世紀の終りには、本當に大なる獸を狩る人即ち麋や山猫 (Limo) を狩る人のみとなつた。逃ける獸を追ふ獵人は道を失ふ事があるがスキーがあれば高地、山、森をめぐつて道を見出す事が容易に出来る。しかしこの様な獵場又は市場へ行く事から後には耕作、畜産が狩獵を驅逐するに至つた時には隣人の訪問にまで用ひらるゝに至つた。

フィンランド人は夏は端艇に乗つて湖から湖へ長い川

を経て旅して廻るが、冬は亦氷に覆はれた道を求めるのである。斯の如くフィンランドのスキーは平地又は氷上を旅行する事により發達せるものである。

スキーを競技化 (スポーツ化) する即ち速度を早くする事を始めてから以前のスキーは終極に到つてしまつた。

例年ウオルに開催せらるるスキー競技會、スキー家には "Oulun hiihto" と言はれて居る會は、一八八九年に始つたこれは直に有名なるものとなり多年、氷の上も含めて行はれてゐる。

第三回の時、アアボ、ルオマヨキと言ふ四十七才の人が三十基米を二時十三分三十二秒で滑つた。一八九六年にはカール、ユツシラは一時五十八分十二秒で滑り、六十基米を四時二十二分五十五秒で優勝した。しかし記録は年々上つて来て、一九〇三年には三十基米、一時三十四分、六十基米、三時四十六分七秒までになつた。前者はマチ、コスケンコルヴァ氏で後者はイ。ニスカ氏の記録である。

この後、スキーが一般の道路に使用せるやうになつてから「森スキー」から、「道スキー」に變化した。その結果、スキーの展覽會に出品せるもの内には長さ二、八八米、巾、六程のハアバヴェシ式と言ふ競漕用短艇 (スカール) の様なものもあつた。このハアバヴェシと言ふのは村の名であつて、ルオマヨキ及びリトラ其他の多くのスキー大家を輩出した村である。

二十世紀の始頃からスキーも次第に新しい運動精神に支配されるに至つた。

一九〇一年にフィンランドのスキー家がノールウエー競技會へ出場した。これはスキーの競技を主とするものである。この競技はフィンランドの地形とはちがつて、山間の地面の上で行はれた。スウエーデン人はこの様な土地を好んだであらう。一は隣國であるし又、軍事上の見地からしてしかし結果は意外であつた。フィンランドのユシラ及びヘボアホなる二人の獵人は三十基米、六十基米に各優勝した。

ノールウエーのスキーは多分ラブランド或はフィンランドから傳つたものであらうが、土地の状態及民族性の相異からスキーもスキー術も全く異なる方面に變化してしまつた。フィンランドに於てはスキーは主として氷に覆はれた川に沿ふて行つたものであるが、ノールウエーでは山から山へ、峽谷を越へて旅行する事が主なるものである。それだから安心の出来ない烈日(クレヴァス)の上に多くの雪があるから、携帶し得る丈夫なスキーが必要になつて来る。そして急な斜面や困難な曲つた路を容易に通過する事を得さず。この様な土地での技術は、氷上スキーと同様に、完全な熟練即ち身体の自在、勇氣、決斷とを必要とするのみならず頑強と強健とを要するものである。

ノールウエーのスキーは、より一般的で、精神的に、より豊富であるから、歐洲の大都會に近いと言ふ事以外に外

國人を、特にな遠方のフィンランドより興味を引いた事は明らかである。人氣の多い飛躍を考へなくても、全世界に興味を起さすものである。ノールウエー人のスキーに對する考へは良い點も悪い點も一所にして、如何に國際的であるかと言ふ事を讀してゐる。フィンランド人が固有の方法で良く滑ると言ふ事は北歐の人々以外には知られてゐない。一九〇五、〇九、一三、二二、の各年の北歐の總ての競技會にて三十基米、六十基米の競争にて優勝したのはフィンランド人であつた。

一九一三年以後、フィンランド人の目的はノールウエー人に勝つ事にあつた。それは二回の競争の後を、フィンランドの氷の上で決勝するのではなく、ノールウエーの固有のスキー場たる有名なホルメンコーレンで勝利を得る事であつた。一回毎に猛烈なものとなつた。よく言へば技術的の仕事になつて来た。コステンコルヴァ氏の如き、この時まで北歐で最も有名なスキー家でノールウエー、スエーデンの選手を破りたる人ですらこの時は敗戦の悲痛と、破壊したスキーとを持つて歸郷せねばならなかつた。

デリケートな、巾の狭いフィンランドスキーは、ホルメンコーレンの地面には耐へなかつたのである。シングル、スカールが外海の荒浪にぶつつかつた様なものである。

フィンランド人は屈撓性と滑り得る性とを以つて、獨特の平地スキーをして強健性と統御性により傾斜地スキー

に變化する事が出来た。多くの思考的な、攻究的な人がこの問題に頭を悩した。その間に一方では困難な地面で勝つ事に自分自身を慣さうとする人もある。その困難な地面には我々が以前には、十分な用心深さから避けた場所であるこの努力は無駄ではなかつた。Or Uthaitanpeita (A.S. 運動具店) に屬する二人の山スキー家なるアントン、コリン及びタバニ、ニクの二氏は一九二二年ホルメコレンで一等賞を獲た。

フィンランド人に取りては習慣よりも境遇の方が有利らしい、何故ならば主なる道の状態は習慣よりも力を要し又滑降場にてはそれよりもより少ない努力にて十分であるからである。數年を出でずして山スキーで世界的の稱讃を得る事が出来るだらう、もしスウェーデン人(これはノールウエー及びフィンランドに勝つとして未だ勝ち得ない)が我々を越す事がなければ。要するにホルメンコーレンにてフィンランドが勝つと言ふ事はフィンランドスキー界の改革を意味するものである。氷スキーは追々雪スキーの方に移つて行くが同時にフィンランド獨特の氷スキー術はやはり保存されてゐる。

幸な事には近來一般にスキー熱が高まつて來た。一村、一學校、一學級の間にも競技會を催し、學生青年はスキー會の爲に盡力してゐる。以前は徹々たる團體又は比較的老年の間にあつて全く振はなかつたものである。斯の如くス

キーを照介し盛んなる状態にしたのは主として森林勞働者達であつた。多くの有名な初期のスキー家は森林勞働者であつた。

飛躍も我々は見棄たのではない、ノールウエー人の教によりて飛躍の會かうイブリの附近で催された。最も上手な飛躍家もノールウエースウェーデンの選手には及ばなかつた以上がフィンランドのスキーの大体の有様である。要するにスキーと言ふものは傾斜地又は厚く雪で覆れた地面を絶対に要するものでないと言ふ事を知るだらう、平地スキーは愉快で且つ變つて居る。山の高さは十米或は五米で十分である。もし我々が曲げ得る足と、軽いフィンランドスキーとがあれば。

板倉勝宣君を悼む

本會々員板倉勝宣君は去る一月十七日立山スキー登山中不幸松尾峠にて凍死せらる。君は本會の創立發起者の一人にして以來絶へず會の爲に盡瘁せられたり。本會の今日ある君に負ふ處多し。謹んで哀悼の意を表す。なほ本誌は四月號を以て君の追悼號と致さんとす。併せて讀者に謹告す。

五月の立山 四

室堂の五日間——その Notes の Albums

大 島 亮 吉

劍岳の登路とそのアレットのエスカラード及び春の雪崩に就て。——劍岳は室堂から最も長い行程を有つた山頂である。時間は殆んど一日かゝつた。三月の友等はもつと時間を費してゐる。私等の登路は最初はどうしても別山乗越からそれにつゞくアレットを登路として、またそれを歸つて來る積りにしてゐるが、それはまた三月の友等のやうに長次郎谷を下つて劍澤を登る同じ歸路をとるこゝなつてしまつた。然しそれは却つて私等に興味ある雪崩の知識を得させて呉れた點に於ては或ひは有益なことであつたかも知れない。

一体私等は三月の時も、また今度の五月の時も劍岳に就ては特にその平藏谷と長次郎谷との普通の夏季の登路となる狭谷が冬、春の積雪期の登山に於ての場合、果してスキートの route として可能性ありや否やと言ふことに就て可成り仲間同志論議したことであつたので非常な興味といさゝ

か乍ら研究心を有つてゐた。そしてそれは結局雪崩の問題如何となつた。

そしてそれに就てはこの二回の登山では察知することが出来たやうに思へる。即ちこの平藏谷と長次郎谷とは一部的ものゝ想像してゐた様にその兩側の多くの雪崩路 (camin de lavalanche) の主路となつてゐて、最も登路としては時期時間に依つて危険であることだつた。

コンピネーションの登山法の場合に於てこの劍岳の登路の問題は現在私等にとつては極めて有益なそして興味ある問題であらうと思はれる。そしてこの問題に對しては穂高岳のごときは却つて簡單であると思ふ。即ちそれはスキートの滑降と岩と氷とのエスカラードのコンピネーションにして興味があるより、單なるそのアレットの traversee に於てその岩と雪との状態とそれに對するテクニクの如何に興味ある問題が存するのであると思ふ。そしてその問題は多分時

間の問題、即ちそのアレートの中間での露營の可能不可能か或ひは登山小屋の有無の問題で直ちに解決せられるものであろうと思ふのである。然て劍岳に於てのコンビネーションの登山法に依るその登山の問題は、この穂高岳のそれよりはより複雑で且研究に價するものであるやうに私には思はれる。たゞ一個の山岳に於てもその登路は時期に依つて相異せねばならない。ましてそれがスキーと言ふ特別な用具の使用せられるコンビネーションの場合に於て然りである。こゝに私はたゞ私の友等の三月に於ける経験と、五月に於ける私の貧しい経験とに依つて勿論この問題を解しようとは決して思はない。また實際に於てそれは出来ないことである。然し乍らこの劍岳のコンビネーションの場合の登路に關し私はこゝに、若しこの次に私等が劍岳に登るとした場合どうかと言ふこゝに就て種々の條件を前提して記すことゝしよう。若しこれが何かの参考にもならうかと思ふからである。

先づ最初その條件を前提すると、時季は冬から早春までの間とする。天候は勿論好晴でなければならぬが、よくこの好晴の日に高いアレートや山頂に非常に寒い北風の激しい時が伴ふこゝがあるが、そのやうな日は避けて、風の強くない日とする。その時私のとうとうと思ふ登路は、室堂から別山乗越(二七四〇m)——別山乗越の冬の狀態は未だ知られてゐないが、勿論完全なスキー峠 Col de la Strikas

であらうと想像する——を越え、鶴ヶ御前(二七七七m)の雪稜か、その山腹を行つて平藏谷の頭ミの間の最低鞍部(二五六〇m)を *depot de ski* とする。そこまでのスキーのアレートは風なく雪質が雪崩の危険なき場合のみで、それよりもやゝ長いが、別山乗越より一度劍澤までの大きなコンカールの斜面をその最低鞍部の下まで滑降してそれにまた登る行路の方が或ひは却つて樂で愉快かも知れない。ミにかゝるこの二路のひとつをとつて *depot* に達し、それからアレートを頂上まで往復するのである。これはその岩稜の登攀距離を可能的に短縮してそのスキーの行路を容易にした所謂コンビネーションの法則に従つて求めた登路である。實際この登路ほど危険なく愉快な登路は私には現在他に見出すことは出来ないのである。

平藏谷、長次郎谷は共に冬に於ては粉雪雪崩 *avalanche* *pourchasse à main* の危険が多いと想像せられるから絶対に登路とみられないが、何より安全である。たとへば早朝、午後の三時過ぎでも尙この粉雪雪崩の危険は冬に於てはあり得るからである。春でも新雪の降つたあとは同じである。たゞ晩春(例へば五月)ならば早朝薄暮にこれを登降することは危険はないと思はれるが、スキーでの登降は、その谷公体が非常に狭く、且雪崩のテブライで充滿し、ために雪面は硬く、凹凸はけしく、岩石樹木の散亂してゐるがため、全然不可能ではないにしてもそれは非常な勢力の不經濟ミ

時間に於ての徒費であらうと思はれる。それ故に現在に於ての私はこの平蔵谷と長次郎谷の夏季の登降路は公くスキーでの行路としては不適當なものでないかと思ふのである。嘗て本誌上に於て澤田正太郎君のお書きになつた様に『最後に望みます。立山の地獄谷に天幕を張り之れを根據地として、星を戴いて出て、剣の頂上輝日を拜す。誰かドステンボーゲンの雄大な跡を長次郎澤なり平蔵澤にのこして更に雄山から淨土へと盡かないかと思つてゐます』の如く、この平蔵、または長次郎の急峻にして雄大な谷の雪面に美しいそして緊張したラーセンのシアージュを描き残しつゝ消えてゆく勇ましき skieur の姿を見ることは少つゝ難しい事であらうと思はれる。

午後四時、薄明の薄灰色の雪の上を五つの skieur の影が谷に消へた。そしてそれから一時間の後には彼等はすでにその別山乗起につゞく急な斜面をしきりに細かなヂツクヂツクを刻んで登つてゐた。その背後には朝の太陽の鮮らしい光線を上半身に浴びて奥大日の頂が喜ばしげに輝いてゐる。丁度太陽が東の山波からのほり出した頃なのである。やがて眼下の雪面も次第に日に輝きはじめて来た。然し遙かの平原にはまた薄紫のかすんだやうな朝霧が深く立ち罩めてゐて、まだその夜の限りからは覺めきつてゐない。そしてその模糊をかすんだ平原の向ふには朝日にその

雪を光らせた劔山のけだかい大きな山姿が浮彫のやうにリ、カルな鮮かさに望まれた。雪面はやゝ硬い粒状雪ではあつたが、その登行は樂であつた。馳て別山乗越に近く、斜面が一層急に狭くなつた處で、終にスキーは脱ぎ棄てられて雪面深く突き立てられた。其處にわが愛するこの一片の "Planche" はその幾時間をいかに忠實に、岩と雪との闘ひに越したその maître の無事な歸還をひとりさびしく待ち暮すことだろうか。情けある skieur の眼差はどうしても一度はその後に残されたスキーにふり向けられずにはゐなかつた。

乗越からはアレートの雪に沿ふて Caravan。五つの人影が絶えず注意してその雪を踏んでいつた。二三個所の急な雪面は西側の急峻な岩稜と偃松をからんだりした。然し雪の状態は至極好い。アレートにつづいては、そのいかつい幅廣な兩肩をいつばいにひろけて威壓的な嚴然とした姿で劔岳は聳えてゐた。八時にはそのアレートの最も低い鞍部に達せられた。そこから上方は恐しく急な雪壁であつた。その雪面と岩稜との間に注意して確實にマルシュシユが踏みつゞけられてゆく。たしかにその足場は雪の階段であつた。より深く注意して五人の手のピオーレは一步毎に深く雪に突き刺されて securie をとる。そこをのほ終つて少し行くと平蔵谷の頭の岩のエスカラードがはじまつた。然しその岩の大部分は全く豫期に反して雪にも氷にも蔽はれてゐずに

よく乾いてゐたので案外容易に、それから頂上まで雪と岩をのほつて九時二十分に劍岳は室堂から五時間二十分で難なく登られてしまつたのである。

五月に於てこの岩稜の大部分は、特に急峻なエスカレーターをする個所は全く雪が融けて乾いてゐるから、その登攀は極めて容易で夏のそれと殆んど變らない様である。劍の頂上まで私等は全へ克蘭ボンつけずにたゞスキー靴のみで登ることが出来た。

頂上には四月四日に私の友等が登つた時結びつけていた目標用の赤旗は全く色褪せ、千切れ／＼になつて残つてゐる。それではまだその旗に記されてあつた "Boushūin" の一字だけが鮮やかにみこめられた。その小さな雪稜をなした頂上の片影に長い休息をまつた後、降路を長次郎谷にまつて出發した。私等が降路として長次郎谷をとつたその理由は、いかにもその登路の際の雪質が確實であつたことゝ、この長次郎谷の雪崩も五月になれば殆んどすべて雪崩れ得べき可能性ある斜面、雪崩路の雪は、全く底雪崩となつて落ち盡くしてゐるものゝ想像してゐたので危険はないと信じてゐたことゝ、更にその落ちた雪崩の状態を見たいと言ふ考へがあつたからである。

頂上と長次郎谷の頭との間には一個所全く急傾斜の雪壁と岩との下りがあつた。始めて其處で克蘭ボンが五人の靴につけられた。そして雪面の表層を故意にピオーレでた

ゞき落してしまつた。これはこの雪面が表層雪崩の危険性ありと思つたからであつた。これは極く特別な場合、是非ともその雪崩を惹起すべき危険なる地域を通過する時にあつて人工的にその以前に雪崩を生ぜしめた後、安全とみて通過することが出来ると考へた時に用ゆる一つの方法であると言ふことである。大きな瀧のやうにもすさまじくその雪崩のテブライは下の岩に打ち砕けては飛散して谷を直下してゆく。そしてその後に残つた下層の硬い雪と岩の間にはじめて緊張して五人の足先は深く確實に足場を求めつくつて、雪に打ち込んだピオーレのセキユリテも深くそこを下つた。全くそけだけが五月の劍岳に於ての唯一の "Gull-chou" であつた。

それからあとは長次郎谷のほぼ中央を一直線に先刻わざと落した表層雪崩の走路について馳けるやうに下つた。その雪崩の走路は丁度リュージュヤトボガシかなぞの滑路のやうに、兩側には落ち残つたテブライが小さな堤防のやうに堆積してその走路面だけが下層の蒼味を帯びた氷となつてゐる。そこを勢よく克蘭ボンの八つのポアントを踏みしめてぐい／＼半ばグリッサードで下つてゆくと、この急峻な恐ろしい長次郎谷の兩側の雪崩路から落下したすべての雪崩のテブライはみな熊の岩の咽喉に集積してゐる。空高く宛から "Eisberg" の山容を小さくしたやうに鋭く打ち連らねてそゞり立つてゐるかの八峰の岩峯とそれにいまこの



エヴェレスト探險隊首腦者

谷一杯に充ちた恐ろしい雪崩のテプリーの山のみである長次郎谷は全く北アルプスでは他に類のない凄壯なベエイサージユを興へる谷である。雪崩のテプリーをみると古く汚れたのもあれば生新らしいのが幾つもある。また最近にも大きな底雪崩が出たらしい。熊の岩から下も岩石樹木と共に雪崩のテプリーは谷全体を蔽ふてゐて、全くこの谷は私等の豫想が外れて五月のいまに於ても尙雪崩はあつてその危険なこゝがつくぐと感ぜられた。時間は正に日中、雪は充分にとけてゐた。氣が氣でないやうに私等は急いで下りつゞけて漸く長次郎の出口へ着いて安堵するこゝが出来た。

雪崩に對しては殆んど現在無知識に近い私等は始めは全く危険を感じず、途中にて漸くそれと知つたけれども、幸ひにしてその危険にも遭遇することなくして無事にこの長次郎谷を下るこゝが出来たが、然し後で思へばそれは全く避け得らるべき危険をその無知識なために知らずして冒して來たのであつた。この場合どうしても私等は再びアレートを降路にとるべきが眞に合理的なこゝであつたのである。たゞ無事に山頂を踏んで歸ることが出来たからとて、この如きは決して眞のアルピニズムの意義より見ての成功した完全な登山とは言へないと思ふ。私等のこの劍岳の五月の登山は完全なものではない。そしてその多くは雪崩に對する知識の乏しかつたことにあると思はれる。

夏に於ては劍岳は全くたゞ天候さへ注意して選べば少しの危険を感じるこゝもなく登れるものではあらうけれど、冬または春にはたゞ無暗に何處からでも何等の危険なく登ることは少し無理であると思ふ。少なくともそれはアルピニズムの一般的な法則に對する知識を持たないに確實に何等の危険性なく登ることは難かしうである。避け得らるべき危険を冒してなされた登山は登山術そのもの、上から見て眞に價値の少ないものになされなければならぬ。例へばこの劍岳の場合で、アレートのその登攀に於ての困難——危険ではなく——は全く吾々のそのテクニクテクニックの如何に依つて充分克ち得べきものであるが、然し長次郎谷を登降路とした時、その雪崩の惹起するこゝを防ぐことは吾々の力では如何ともしがたい不可抗な自然力である。そしてその不可抗な雪崩の危険は當然アレートの吾々の力で克ち得べき困難に依つて避け得らるゝのであるが故に、敢えて長次郎谷の雪崩の危険を冒して登降するこゝの無意義なこゝは言ふまでもないことかと思はれる。登山術の根本の要件として吾々は次の言葉を胸深くに有たなければならぬと思ふ。

"Mountaineering is the art of getting up and down no mtnains in good style, with ease to oneself and with safe to his companions"

Harold Raeburn.

確實な登山のテクニクとその法則に依つて吾々が確實に完全に山岳を味はうことはまた登山のひみつのシヤルムであると言ふことである。こゝに於て私は『山を味ふ手段としての登山に、冒険が出て来るのは甚だ残念である。避け得らるゝ冒険が得意になつて冒される間は、この方向の眞の味は知ることが出来ない筈である。人力の及ぶ限りの確さをもつて地味に小心に、一歩々々と固めて行く時に初めて今まで夢にも知らなかつた山の他の一面がぞり／＼と我等の胸にこたへて来る。』と言ふ板倉勝宜君のお言葉に深い啓示を抱かせられるのである。

長次郎谷の雪崩に就ては勿論これだけの経験ではそのすべてに亘つて言ふことは出来ない。たゞ私はこの谷の五月の雪崩に就ては前記したやうにも、それはもう全く落ちるべきすべての雪は底雪崩となつて落ちてしまつてゐるだらうと想像してゐたのであつたが、その實際はなほ底雪崩と共に表層雪崩さへも度々惹起するやうな状態となつてゐた。即ちそれによつてこの谷の雪崩危険は充分五月一杯は續くものに見なければならぬのである。一体冬、春の積雪期の登山で今日吾々は遭遇すべき危険災禍は数多くあることではあらうけれど、總て其等のうちで最も重大な災禍の結果を齎らすものはどうしても雪崩に置かれはしないかと思ふ。そしてその雪崩の危険は或る程度まで充分経験し知識とを以て避け得らるゝのである。それ故に現在の状態

に於ては、吾々はその経験の部分をば、冬春の雪崩の状態事情に詳しい獵師を案内者することに依つて得、その知識に關する部分をば主としてその専門の書籍の上で得たならば可なりの程度まで雪崩に對するその災禍を未然に防ぎ得て、この *course d'hiver* 及び *course en ski* の新しい登山のタイプを安全に、愉快に味はうことが出来るであらうと思はれる。

夏に於てはこれら信飛越の山々は決してそれが必ず要する言ふほかに、眞の "*regle de l'alpinisme*" やその知識或ひはテクニクを要求する程度の山岳ではないのである。然しそれが冬、春の積雪期に於ては充分にある程度まで、雪質、雪庇其他雪に伴ふすべての知識、氷と岩に對する特別なテクニクとそれに伴ふ *encordage* の如き登攀の法則、方法を要求する程度の状態にまで進んでくるがため、其處には夏期に於ける登山のそれに比しては、より精確な、そしてより知識的な、より合理的な登山の知識とテクニクを要するものではないかと思はれる。

長次郎谷からは劍澤の巨大な岩の頂とアレートに狭められた谷底から、次第に緩傾斜に開けてゆく大きな谷底を五つの *pleion* の姿は靜かに一歩／＼高くなつていつたこの別山、鶴ヶ御前のアレートの半圓をとりかこんだ *amphi theatre* の底面は實に *skieur* の滑走慾を唆らすには置かないやうな理想的な大きな斜面であつた。然しいまは *pleion*

の悲哀、その大きな斜面をたゞ乗越をめざして重たい足を
一歩づゝ重たい雪に踏んで點線に連續したそのピストを残
していつた。乗越からは *depot de ski* まで馳け下るやう
にして漸く *skieur* はその永い間を待ちあぐんでゐたやう
な彼の愛する *planche* の傍にたどりついて、ある感謝に似
た一種の感激を以つて彼の足にそのアツタツシユの紐をし
めるのであつた。コンビネーションの登山に於てのひとつ
のシヤルム、歸路の楽しい慰安をほたしかに *retour* に於
ての滑降が與へる悦樂でなければならぬ。

直ちにそこからは歡喜に充ちくたラーセの流れるやう
な美しいメアンドルが山腹の雪面を滑りつゞいて谷にまで
連續した。谷からはまたそのゆるやかな谷底の重い融雪面
に疲れたやうなシイアーージュを引いて午後三時には懐しい
室堂の前に再び五人の *skieur* は、その愛する *planche* を
ば雪に突き立てることが出来たのであつた。

五月の立山に就て私は以上の如くくだらぬことを長々
書きつらねた。然しそれは全く要するに以下の短い一章で
充分にそれ言ふことが出来るであらうと思ふ。

先づ天候とか寒氣とかに就て言へば、冬、早春に於ては
私等は總て其等のものに對して最初から一種の壓迫威嚇を
享けるけれども、五月に於ては全く其等に對して何等の顧
慮はないと思ふ。吾々は五月の太陽の暖かさ、天候の比較
的安穩なこと、晝間の永いこと等で全く其等の自然の平和

な慈心のうちに親しみ深く、餘裕を以て山々に接し得られ
る。更に言葉を換へて言へば、いかにものどかな心持で登
ることが出来ると思ふことが言へる。そしてそれが最も五
月の特色ではないかと私は思ふ。

それから雪質に就て言へば、冬にはあのネージュボード
ルーズのスキーの滑走には理想的な雪質があるが、五月に
はまたそれに比較して餘り劣らない壯快さを與へるい
ろ／＼のクルートの滑走感があることを以てそれに對峙し
得ると思ふ。

たゞ五月となつてはもう堅い氷と岩とに對しての所謂
"un joli trevail au piolet" の氣分が殆んど味はへない
ことは *skieur* のみでなく、また一面に於て *grimpeur* で
あるものにとつてはひとつの大きな遺憾である。

とにかく五月に於ては、私等はごく氣樂に登れる。樂で
ある。安全である。私はこゝに、ある限られた本邦の高山
のうちには於ては、五月に於ても尙スキー登山が充分の効果
を以てなし得ることゝ、それが可成りの程度までそのすべ
ての點で私等の一特に私の要求を充して呉れたことを諸君
にまでお知らせすることが出来たならば、それで私のこん
な長々しい、くだらぬ記述をこゝに書きつらねた唯一の目
的は充分に達せられたことになるのである。

ヒユツテの位置と設備について

加納 一郎

位置——小屋は大いに難儀した後、漸う行き着き得らる程、遠い所を撰んでたてる必要はないと思ふ。一〇乃至一五km位のところが丁度いゝだろふ。此に記さうとする小屋は、山中の長い旅行を結びつけるステツプストーンとして必要な小屋ではなく（近き將來に於てさうなることを望むのだが）今は、亞鈴の小供に於けるが如く、野營の訓練になる様な小屋の事に就てである。だから距離はなるべく近くして週の終り毎に出掛けて行くことが出来て、且一般の人々にポピュラーなものになり得らる様にした方がいいのである。

そこは一年を通して飲料に適する水が得られなければならぬ。（冬は雪を使用するが）其他の種々な條件、例へば風、出水、雪崩、地盤、虫害、燃料に就てもその地方地方によつて考へねばならない。

装置——日本アルプスの山地でよく見る。時代遅れのこ

やでは、何故か煙突をつけないもんだから煙は出口が解らないで低迷し小屋を不愉快に汚くする。若し適當な石材を得ることが出来れば丈夫な煙突を立てるにさう費用はかゝらない。此は科學的方法の第一に探るべきものである。その次は料理道具である。米の飯を食ふことが止められないならば（若し出来るなら止めた方がいい）。米は比較的重いから）飯釜を置かなければならない。若し鐵籠が出来なければ自身で、石か何かで一つ作ればいゝ。

皿、茶碗等——磁器、特に日本製のものにはデリケートで山男が亂暴に使へばすぐ壊れてしまふ。だから硬い丈夫なものか、出来るなら金屬性のものにすればいゝ。澤山の、茶碗、湯呑、箸、鍋、釜、藥罐。藥罐は大きいのなら洗濯用の湯を沸すことが出来る。

食物——食料は各人が運んで来る筈である。而し共通なもの、例へば砂糖、鹽、醬油などは準備してあると便利で



北面より見たるエヴェレスト山

ある。

寢床——普通の蒲團はいけない。何せならそれは高價で且つあまりに早く汚れ易い。ハムモックか強い布で包んだ藁蒲團で充分間に合ふ。掛蒲團は云ふまでもなく毛布である。大きな一對の毛布は嚴寒に於てさへ、その重さに比して全く充分である。毛布はどこかの明間か天井に掛ける様にして置く。

燈火——大きな蠟燭とラムプ。幾分かの豫備の石油。

木を斫る道具——大きな樹を伐ることの出来る斧と、鋸、二三人で樹を伐ることが出来る様。

机と椅子——丈夫なもの。又日本人は一日の勞働の後に沐浴することを好むから小屋の近くに風呂桶をすゑるものいふことである。

掃除道具——箒。はたき及び此種のもの。此う云ふ風なものがないれば小屋は汚くなり勝ちである。

危急の際に具へる醫藥。

小屋の管理及その使用規定——小屋は皆に公開すべきである。山岳會に屬しない人にも公開する。かうすれば公衆の心に山岳趣味を起させ、また後になつて全山脈を通する小屋の連鎖を作るまきに好結果を得るであらふ。

小屋には記入帳を備付けて使用した人の住所姓名並びに若し氣付いた點があつたら書付けるこゝにする。

小屋を如何に使ふか——定められた規則に従ふ様にせねばならぬ。使用者に對する規定は次の様なものである。

小屋を去るまきには窓や戸をよく閉めて置くこと。

寢床は使用後きれいに片付けて置くこと。

火災の起きない様に注意すること。火に水をかけてはならない。それは全てのものを損ふ。

床を掃除し美しく保つこと。

次に来る人の爲に充分な薪を残して置くこと。

水はどこで、どうして得よ。(此の事は大切なことである。水を汚濁ならざる様保たねばならない。)

火を作るにはさうするか。

籠を使ふには——

どうして洗ふか、大きな洗桶に熱湯を相當量入れ、適當な洗滌石鹼を溶解し布箒を使ふ。(手を入れるにはあまりに熱い。銀製のもの(ナイフ、フォーク、スプーン等)

磁製のもの、次にそれ以外のものご云ふ順序に洗ふ。一人が洗つて他のものが拭く。或はバスケットの中に入れて、水をほしてもよい。

鍋、釜、フライパンの様な大きな容器を洗ふには、それに水を充して、(必要ならば石鹼を溶かして)並べて置けば、どんな粘質のものでもきれいにとれる。

いらぬもので燃ゆるものは焼いてしまふ。さうでなければ芥溜へすてる。他の所へ投げてはならぬ。若し下水

設備がなければ、使つた水はどこへ捨てるかを明かに示さねばならぬ。

危険なものを残してはならない。

小屋を監理する人は常に良好な状態にある様に注意する使つた人は小屋に何か悪いところがあれば、貯藏石油が残り少くなつたとか、斧が切れなくなつたとか、又は布が汚くなつたなどと、直ちに知らすのはよいことである。

場所——必ずしも荒蕪地の中央になければならんと云ふ事はない。四近を跋渉する中心となる可き所にするのが便利である。また小屋の連鎖の計劃の第一歩として考へる要がある。

土臺——掘立小屋式のものを採用してはならない。それは半永久的な建物を支持することが出来ない。どんなものでもいゝから手近にある石を使つてセメントで硬める。ヴェンチレーシヨンのいゝ穴藏を作り濕氣を除く。いらぬものをしまつて置くインホールを作る。

壁——モルタルを使つてはいけない。木の板を原料にし、表面を防水性のフェルトか何かで仕上げる。

ベンチ——上の方で開いてゐる、よつかゝりがあつて、天井にかけるよりいゝと思へば毛布を此にかける様にする。その上で眠れる程の廣さにする。

暖爐——費用にかゝらず此は一つなければならぬ。此は楽しい夕の中心となるものである。構造は簡單で大きなもの。竈の煙筒はメインチムニーに導く。

流し——此はさう高くかゝらないものだが、その効用に於ては不思議な位役に立つものである。流しがないと使つた水が小屋中にとんで、たとへ定まつた所でやつても、時がたつと小屋の附近は悪臭に充つ様になる。下水をして飲料水を汚損せしめない様に注意せねばならぬ。

窓——日本家屋の最も不完全なものは外氣との交通にあまりに粗なる點である。此の爲には硝子窓を使ふべきで、此は好むまゝに開け立て出来る。此等の窓によつて、小屋はたとひ粗造のものでも外氣と絶たれる事を記憶し、眠るときには出来るだけ澤山の窓を開けはなして常に新鮮な空氣を得る様にして置くことを忘れてはならない。そうでなければ、わざわざ味はひに來た山生活を全く臺なしにしてしまふ。

ポーチ——此は必ずしも必要ぢやない。而し夏の夕に都合のよい場所に作るがいゝ。

薪材貯藏庫——相當澤山な木を乾燥して保つに十分なものが必要である。それから雨降りの日の爲の豫備薪材の貯藏も出来なければならぬ。

何度も採集する代りに一度に、冬の雪のある時が最もいゝと思ふが、澤山取つて置くこゝもある。一時に集めてを

き全期間にあてる様にする。腐朽しない様に被蓋して置く
要がある。

屋根——瓦は運搬の點からよくない。軽い屋根材には或
る特許のフェルトがいゝ。

便所——此は小屋から相當な距離に作らねばならない。
溜壺が充満すれば便所を移して古い溜壺を蓋つてしまふ。

芥溜——蓋をして悪臭の放散を防ぐ。

下水溜——下水の衛生的取扱についてはその道の人に相
談するがいゝ。最後の三つは、何よりも大切なことである
から、小屋を設計する時に、よく合理的考慮を拂はれん事
を望む。

實際的方面に就ても少し云ふなら。先づ諸君は此の様な
小屋を建てるに何れ程の費用が要るか尋ねるであらう。
私にはあまり遠くはなれすぎているから解らないが六百圓
位で出来るだろふと思ふ。幾分粗雑であつても簡単な構造
は山男には全く充分である。

ではその金をどうして得るか云ふでせう。では一体、
小屋を欲する俱樂部なり會園なりの人数は幾何であるか。
そして夫等の人が石材や木材を運ぶ筋肉云ふものを持つ
て居るのであるか云うか。若し運ぶ方法を知つてゐるなら
大抵費用の見當はつくであらう。

諸君が此う云ふ小屋の一つを持ちたいと思ひ、そのくせ

此の運動に取掛るに充分な勇氣を持たないのなら、私はこ
う云ふ事を書くのではなかつた。私は然かあらざらん事を
望むのである。

私は諸君は模倣者ではないと思ふ。創造力を持つて居る
と思ふ。で作るならばその土地に適した特色あるものを作
つてほしい。以上は唯、参考に供してもらひ度い爲に書い
たのである。

寫眞說明

第二回エヴェレスト探險隊首腦者

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. Mallory. | 7. Morshead. |
| 2. Finch. | 8. G. Bruce. |
| 3. Longstaff. | 9. Noel. |
| 4. The General. | 10. Wakefield. |
| 5. Strutt. | 11. Somervell. |
| 6. Crawford. | 12. Morris. |
| | 13. Norton. |

North col より見たるエヴェレスト山の北面 (Finch—
Bruce route)

右より (矢にて示めせる) Summit

27,300ft.

N. E. Shoulder.

Camp 26,500

雪 草 紙 二

ボースニーゲル

☉ どうもスキーを穿くと山へばかり行きたがる此のボースケーニゲルの事であるから世間の事はあんまり存じませんが、何でも一年中土の上ばかり歩きまつてゐる人間の世界では、何か一つの事がはやるとそれに

ついでと云ふこととあります。此んな手合は大低自分の懐を肥そうとする御方か、それとも賣名の徒であると云ふ話です。雪を相手のスキーにはそんなものはない筈ときめ込んで居たのは大間違、近頃のスキーの盛んなものについでこんで氣の知れぬことを企てる御方がそこいらに出て来た様です。そんなものにかゝり合つてゐるのも愚なことながら、此處に

一つあまりひどいのがありますから書かして頂きませう。

スキーの一つも持つ程の御方は書店の店頭で一度は手にこりながら大低は、をそらくは買はずに投出された事だろふと想像する一冊のスキー書。云ふとは「んあれかとうなすかれるあの「スキー術早わかり」。それです小生の云はんと欲する所は。題を見ただけでは直ちにきわものはないと思ひつゝも著者の名を見ては思ひ返へさるを得ませぬ。人のいゝ小生は多分、出版者の意によつてあんな題を付けなければならん様になつたんだらうと考へつゝ、著者が著者だけに寫眞やダイアグラムの得意のところがあるのだらふと手にと

つて見ると、こは如何に、繰あける頁云ふ頁、別にこれはと思ふものもなくいさゝか、がっかり、さてはこゝの望を内容に持しつゝ讀み行けばいくばくもなく失望の感わき、慨嘆の氣起り來りぬ云ふ次第でありました。思ふに多分、をそらく、願はくば丸山晚霞氏はたゞ名前を貸しただけではありませうがそれにしてもあまりに感心せぬのであります。あの貧弱なカバーの中に此の洋書家の名を見るさへ不思議な感が起ります。いかさまとは云へスキーの書物で儲かつたためしはなく、此の著者にして今更賣名でもなからふ、一体どう云ふ氣なのかと緒言を讀んで見ると「我國で行はれてゐるスキー」

その造り方は知らないが彼の地（瑞西ツワイシンメンを指す）で練習した方法も、又見聞したことや歐洲雪の園で著はされた各種の参考書によつて、この書を著はしたのである」云。これでは文句の云ひ甲斐もない。たゞその厚顔にして暴虎馮河そのけなるの點に感心三嘆するばかりだ。而し此れでは何にもならぬ故一理窟申し上げれば雪の質や地形が所謂彼地と日本と同じだと思ひになるならそれまで、彼地の書物を譯する位のことはその道の人の手にかければわけもないことである。またそうした書物に既に日本にもある。そしてつゞ同著よりも解りやすく上手に譯され編纂されてゐる。將來スイスへでも行こう云ふ人は格別日本に居つてスキーをやらふと思ふものには日本のスキー術もスキーとが必要なのであり、今迄及び現在の多くのスキー家が日本のスキーに就て、どれ程苦心をしてゐるかを知つ

たならば「我國のスキーは知らない」など云ふ様なひどいことは言へない筈である。又著者は「スキー術を科學的に研究した適當な良書がないとの嘆聲を聞くことは久しい」との仰なれど一体科學的研究とはどう云ふ事だ。「スキー街早わかり」位のものなら、あんまり大きな事は云へたものではありません。それにその文章と來たら殆んど意味をなさない所さへあるスキー術の説明は解りにくいものではあるが、これに到つては極まれりである。「早わかり」ころのさわぎではない。筆者自身にも何の事やら解らないだらふと思はれる節が少くない。向ふの著書によるとの語であるが別に目あたらしいものもなささうだ。ヘーク、リックマー、ラン、カウルフィールド、リッチャードソン、フィットフェルドなどのものはミツクの昔から日本へ來て。大低のフェラインでは装釘がくづれる程ひねくりまはされてゐるも

のである。せめて挿繪なりとも御手ものなれば獨創的のものがあるかと思ひの他その多くは向ふの書物の寫眞を、をほつかなくも模寫したものである。是に到つても此の書物のとりえはなくなり、又小生の悪口も終りをつける次第です。要するにです一昔時なら或は珍重されたかも知れない此の書物も今日に於ては只々その出版の無意義なること云ふまでもなくその題名と著者の名に引かれて、一度此によりてスキーを初めんなどと思ひ立ちたる初心者をして、誤まること甚しき想像に難くないのであります。

小生は日本スキーの文献の貧弱にして一も満足するに足るものを感じずるものではありませんが、地のシーズンに當つてまさかこんな書物が表れ様は思ひませんでした日本のスキー界の爲にまた著者の爲に悲しむべきことではありませんか。一寸躍氣になつて見ました。

●此は北大スキー部の青山温泉での合宿中の事ではあるが、温泉から斜面まで約二キロ程の往復に百何十名かのシイロイフアーが一列になつて進む有様は大層見事なものでありますそれはいくつかのセクションに分れ各セクションにリーダーがゐるべくマネージするからであらふ。畑スキーは別だが。五人なり十人なりで山へ行くときにリーダーの必要なことは云ふまでもありませんが。登山をきもちよくやり十分に愉快さを味はつてくるのには、そして何の心配もなく一日を送るのは勿論皆の氣持によることではあるがリーダーシップにもよることが多い様です。誰でもコンデイションのいゝときは自分ひとりでいゝ氣になつて滑るものですが、一寸雪行きがわるくなるミ心の中ではひそかにお互がたより合つてゐるものです。此は口にこそ出さぬがどんなになれた人でもそう云ふ傾向が心の底に湧いてくるもの

ではありますまいか、假にたつた一人で山の中へはいると、いくらうららかな明るい天氣のときでも何だかものたりない氣がして何度猛烈な直滑降をくりかへしても、も一つばつさしないものです。仲間のすべるのを見て楽しむこともスキーには大切なことです。山になれた人がリーダーとして後からついて来てくれると思ふと安心して滑れるものですが、そのリーダーも心の底のどこかには誰かを變分たよりにしてゐることは確かですスキーの山登りは一人の仕事ではありません。

●前に畑スキーと云ふことが出ましたが、これは山黨に對して畑黨と云ふのがあります。それから出て来たもので山黨と云ふのは主にスキー登山をやるもの、畑黨と云ふのは主にスウィングやジャンプをやる連中をさすのです。即ちこう云ふ連中の滑るところは大低丘陵か原野に近い斜面で、なるべく樹木や灌木のな

い所を撰ぶので自然斜面が農耕地になつてゐるところで滑ることになつて来るこれが畑なる言葉の起りでありますが、一寸變な感じがします、畑スキーのひざいになるも全く雪はコンクリートの様に堅く踏みつけられてしまつてスキーの條痕が印せられないばかりでなく、古いスキーでは角付もきかない様になります。こんな所では燕返しと云つた様な技が行はれ易いのです。

而し一般に畑黨の技術は繊細で奇麗ですが山黨の技術は確實で壯大があること云ふ傾向は明かに看取せられます。山にしろ畑にしろそれはやる人の性來の好みによつて分れるのである故そこに自ら異なるものが生れて来るのは明かであるが、やはり技と云ふ點になると畑黨の方が上手であるのは争はれないことです。だから山黨だと云つても、畑で滑ることを怠つてはならなくなります。何故なれば今日山に於けるスキー術は畑スキー

の技術をとり入れる餘地はまだ十分にあるからですまた山黨でもホッホゲビルゲを自あてにする人は、ザイルやピツケルのテクニークをシユヴングなどと同じ程に練習を積まなければならぬと思ひます。

近頃の様はスキーの競技會が盛んに行はれる様になつて来た以上はやはり本來のスキーと云ふものは畑黨の手にあるものとなるでせう。そして山黨と云ふものはスキーなるスポーツの上からは或は一種の特殊扱をされる様に、ゆくゆくはなりはしないでせうかまたそれがほんとうではないでせうか。

彙報抄録

第二回エヴェレスト探險

エヴェレスト登山は一九二一年の探險によつて既に十分成功の望みある事が確められてゐた。即ち探險隊中の一員 Malory 氏が北面から頂上への登路を發

見し、この年北面のホルまで到達する事が出来た。

この登路の發見によつてエヴェレスト登山の成功を見るだらうきは英國あたりの定評である(附言しておくがこの北面のホルはフアーストアツセンドに成功した人の名を冠する事になつてゐる)が第二回の探險隊も又もや追返へされた。

Parker 氏によると一九二二年の探險隊は頑張りで終始一貫すべきで従つて風強なもののみの一隊でなければならなかつたといつてゐる。これについては探險隊の首腦者も略同様な意見で完全な準備品と外に力が足りなかつたのが失敗の原因だといつてゐる。

今一行の顔ぶれと技術とを見るに Finch, Malory, Norton, Somervell の諸氏は既に定評があるから述べないが稽老齡の嫌はあるが Shutt 氏も前記の諸氏に劣らない蔡の者でアルプスの高峰に於て特に冬期登山、夏期に於ける新雪の經驗は一行中氏の右に出づる者はないと讃辭を呈して居る人がある。事實氏はこの探險に於て二〇〇呎以上の高地で數週間の活動をし壯者をして啞然たらしめてゐ

る。この外 Moshed は Kanet の二三五〇呎以上まで登りこの一行中最も頑張りのきく又テクニクも最も確かな一人である。Wakfield と Crawford は専ら荷物の運搬に従事してゐたからその技術は未知數であるが二人ともホルまでは送してゐる。Geoffrey Bruce は、これこそ全く未知數で底知らずの粘り強さがあるらしい。

以上がこの一行の首腦者の顔ぶれて何れも銜々たるアルピニストである。

一九二二年五月二十一日 Malory, Norton, Somervell, Moshed は北面のホルを出發して約二五〇〇呎の地に天幕を張り同二十二日天氣はよい方になかつたが Moshed を除く三名は二六九八五呎まで送した。これは前年の記録に勝る二四〇〇呎の高處で一行は非常な困難と危険とに遭遇しこれ以上登る事は出来なかつた。この一隊の失敗の原因は酸素を携帯しなかつた事にある。酸素の携帯については可なり面白い議論があつたらしい、即ち文明の利器を利用して登山に成功するのは山に對して冒瀆であるとし酸素を用ふる位ならば飛行機を以て一足

飛びに山頂に到達する方がよいといふ論が出た。これらは英人の保守的な考へを遺憾なく發揮してゐる處かも知れない。これに對して Finch 氏は「文明の利器を用ひないとなると魔法瓶その他の物も用ひられない。寒さを防ぐ爲にも特殊な防寒具は用ひられない。又特殊な飲食物も用ひられない事になる。能率を増さん爲には今まで盛んに文明の利器を用ひてゐる。酸素を用ひて不可といふ點が何處にあるかエヴェレストは人類の全能力を發揮せしむるに足る空氣がない而してこれを補ふ爲には是が非でも酸素の力を借りる合理的な登山法でなければならぬ。酸素の供給なくして人類の登り得る高度を知るは重要な問題には相違ないが我一行の最終の目的ではないといふ事を主張した。こゝに至つて成功は酸素携帯の一方法あるのみといふ決論に達した。

五月二十五日 Finch, G. Bruce 及び Gunkha 嚮隊の下士 Tejbir (印度人) の一行は北面のホルを出發し一日二夜二六〇〇〇呎の地に暮營し前記二名の英人は各四〇封の荷物を背負ひ更に二七三〇〇呎の地點まで達した。眼前に山頂を見な

がら酸素の量と力の不足の爲にこれ以上の登山は不可能だつた。かくしてこの一隊も遂に引返へされる破目に陥つたわけである。然しこの二七三〇〇呎は人類が登り得た最高々度でこれが一九二二年の探險の收穫である。

寫眞技師 Cap. Noel と Cap. Morris 等の一隊はこれには及ばないが一肥録を作つたと報ぜられてゐる。

以上は一九二二年の探險の概略で、もしこの探險が一九二四年まで續行されるならば必ず成功の自信がある。それにはなほ一層の準備上の注意高山に於ける冬の降雪の研究、とこれに對する訓練とを前提としなければならぬと探險隊員は宣言してゐる。

(The alpine journal Vol. XXXIV)
Farrar, Finch, Mallory 等

國際スキー競技會

國際スキージャムピング競技會は本年一月十四日より二十一日の間に、スウイスのクロスステル、サンモリツツ、アロザ及びグボスに於て開催せられたと云ふ

ことである。また一月二十六日より二十八日までグリンデルヴァルトに於てスウイススキー撰手權大會が開かれた。二月の四日から七日まではブラーゲに於てスキーの國際集會がある。

(加納一郎)

スキー遭難保險

獨逸スキー俱樂部は一九二二年一〇月より二三年一〇月までの一年間に於ける俱樂部員のスキー、登山旅行に際し遭難保險の制を設けた。之は死亡の場合には五〇〇マルク廢病の場合には五〇〇マルクであるが俱樂部員の希望により手数料を多く出せばより高い保險金を得ることが出来る。(加納一郎)

★ ★ ★ ★

絶好のスキーシーズンになりました。

本年も亦

スキー。スキー服。

スキー靴。他附屬品

共皆様の御期待に添ふ様にと種々の新考案を加えて鋭意理想品の製作に努力致して居ります。相不變御愛用の程を。

目丁五西條一南市幌札

店 具 動 運 谷 小

番四六九七樽小座口替振・番八六五一話電

北海道帝國大學
スキー部編纂

スキー術階梯

定價五拾錢

□本書の内容は北海道帝國大學スキー部が部員に頒布する『スキー術教程』と同じであります

□四六版コピーリア表紙。スキーの準備から技術登山法にわたり初心者を標準として解り易く書いてあります

札幌市南壹條西三丁目

販賣所 富貴堂書店

◆ 山ミスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を

發行する爲に作つてゐる會です。

◆ スキーを研究せらるる人、登山に興味を持たるる方が一人でも多

くお読み下さることをお願いいたします。

◆ 雪の善悪、山の高低にかゝはらず諸方面から御寄稿下されんこと

をお願いいたします。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆ 原稿は、ゝ。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆ 記事中の數量は全て、C. G. S. 系によられん事を望みます。

◆ 雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定 價 金參拾錢

* 前金御申込が、現金でなければお渡しいた
しません。

* 御送金はなるべく振替にてお願い致します。

* 六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

* 前金の切れた時には最後の分の包装にその
旨記します。次の御送金あるまで配本を見
合せます。

* 本誌は營利的の刊行物ではありません。紹
介、縁故の有無にかゝはらず雜誌の代價は
頂きます。

大正十二年二月十四日印刷
大正十二年二月十五日發行

(毎月一回十五日發行)

編輯印刷 兼發行者 加 納 一 郎

印刷所 札幌印刷株式會社
札幌市北一條西二丁目

發行所 山ミスキーの會
札幌市北六條西七丁目

振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
 de la
 Monta kaj Skia Klubo
 No. 24. Feb. 1923. Sapporo, Japanujo.

大正十二年六月七日第三種郵便物認可
 大正十二年二月十四日印刷
 大正十二年二月十五日發行
 本行

(每月十五日發行一回)

山とスキー 第二十四號

定價金參拾錢



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目日角

太田屋靴店

電話小石川四七二番

振替東京六一七二番